

## 原著論文

# ケニアの牧畜民マサイ社会における遊びとその変遷： 子どもの日常生活と大人の語りに着目して

田 曉潔\*

## Transformation of Play in Pastoralist Maasai Society in Kenya: From the Daily Life of Children and the Narratives of Adults

Xiaojie TIAN

### Abstract

In recent years, increased attention has been paid to traditional sports and games as useful phenomenon to understand cultural identities in African countries. With this re-evaluation, national and international institutions began to develop educational programs for the transmission and conservation of traditional games. However, due to limited empirical investigation of play activities in different subsistence groups in Africa, understanding of play as cultural phenomena still pays little attention to children and their roles in cultural generations. This limitation may lead to misunderstanding or misinterpretation of play and its transmission in different sociocultural contexts. Till now, anthropological studies focused on children and their development in non-western contexts highlighted the active roles children take in cultural generations through their participation in social activities. These studies emphasized the importance of understanding the diverse forms of children's cultural learning in different sociocultural contexts, and this focus could also be applied to the study of play and its transmission in time and space.

This study investigates the daily play of children and its transformations across generations within a pastoralist Maasai society in Southern Kenya. Focal observation of the daily activities of 13 children (2 to 11 years old) has been conducted, and children's daily play was documented considering their contents, locations and participants. In addition, 80 adults (40 females, 40 males) in the same area were interviewed about their playing experiences during childhood.

Findings of this study show, first, various play activities were continuously practiced by Maasai across generations during childhood. Second, children's participation in play activities are usually only undertaken with peers, and without instructions or guidance from adults. Third, through daily play children continuously develop their intimate relationship with livestock and natural elements such as plants, insects and wild animals. Results from this study highlight that culturally significant play activities are still continuously practiced by young generations in societies where children continue their social activities whilst performing other roles. In these societies, instead of taking traditional sports and games as practices of the past, and incorporating them into the school curriculum, it is necessary to document the transformations of different local play activities in concurrent sociocultural contexts considering children's social participation, their roles in culture generation, adult generations' play experience during childhood, and the features of learning in the targeted society. For doing so, further investigation of daily childhood experiences using ethnographic documentation is recommended.

---

\*筑波大学体育系

**Key Words: Pastoralist Maasai; Daily Play; Cultural Learning**

キーワード：牧畜民マサイ、日常遊び、文化の生成

## 1. 背景と目的

アフリカ大陸では世界の言語の約三分の一が使用されており、それほどまでに多種多様な民族集団が存在している。そのうち、サハラ砂漠以南の諸地域で生活する民族集団の間では、非常に多様な遊びが実践されてきた。しかし、それらの地域に暮らす民族集団の多くは、過去の出来事を伝える手段として主に口頭伝承を用いており、遊びを文化要素として書き起こして記録する慣習がない。そのため、それらの民族集団の伝統遊戯についてのわれわれの理解は、1900年代前後に記録された植民地政府の行政官や欧米の冒険家の日記、及び早期の文化人類学者による民族的な記述によるものがほとんどだった。その後、2000年代になって、ユネスコが提唱する文化的アイデンティティとしての伝統スポーツと遊戯 (Traditional Sports & Games) を再発見・保存するための研究と保全活動がアフリカの諸国で展開し始めた。例えば、南アフリカの「在来遊戯研究プロジェクト (Indigenous Games Research Project, 2001/2002)」や、ルワンダ国立博物館とルワンダ・オリンピック組織委員会の連携による「ルワンダの伝統遊戯と武器プロジェクト (Traditional Games and Weapons in Rwanda Project, 2018)」、ユネスコとケニア国立博物館の連携による「ケニア・伝統遊戯デジタル図書館プロジェクト (Open Digital Library on Traditional Games in Kenya Project, 2017)」などが挙げられる。そのような動きのなか、ナショナル・アイデンティティの形成における伝統スポーツと遊戯の重要性が提起され、同じ国の異なる生態環境に暮らす民族集団の伝統スポーツと遊戯の再発見、及びそれらを継承させるための保全と教育のプログラム開発に高い関心が集まっ

ている。

ユネスコによれば、伝統スポーツと遊戯とは、儀式的・ルールを持つレクリエーションであり、地域社会のアイデンティティと文化を示す重要な役割を持つ個人的ないし集団的な運動として、口頭伝承などによって次世代へ継承させる文化活動であると定義されている (UNESCO, 2017)。その概念に沿って展開されつつあるアフリカ各地での活動には、同じ国であっても地域的特性を持つ多様な民族集団が存在することに対する考慮や、その定義から逸脱する多くの遊び実践に関する考察が欠けているといえよう。

同じような課題は、東アフリカの地域社会における遊びに関する、20世紀の先行的な民族誌記述にも見られる。当時の研究の多くが非日常的な儀礼としての伝統遊戯に着目して、文化としての遊戯の地域性についての議論を展開してきた (c.f. Cheska, 1987)。一方、世界のほかの地域と比べて、上記の伝統スポーツと遊戯の概念に当てはまらないアフリカ諸地域の遊びに関する実証的な研究はかなり限られている。遊び当事者の捉え方を見過ごすことは、文化としての遊びを理解するためには不適切である。また、遊びの継承についての議論において、その対象となる子ども世代の遊びに関する考察が欠如しており、子どもを単なる文化の受け身としてのみ捉えてきたという課題も無視してはいけない。20世紀以降、近代開発や学校教育の普及などによって、アフリカの多くの民族集団の生活様式における変化も顕著になっている。そのような背景をもとに、文化要素として存在する地域社会の遊びについて理解するには、子ども期の実践に着目して、時代を超えて変化しながらも続いていく遊びの特徴を捉えることが重要である (e.g. 寒川, 2003)。さらに、子どもの学

習形式についても、その地域性を考慮に入れる必要がある。大人から子どもへの知識の伝達形式についての議論の中では、西欧の工業先進国における子育ての特徴が人間の普遍的な学習形式として捉えられてきた。しかし 2000 年代から、非西欧社会の子どもの社会化と学習についての文化人類学的な考察が急増し、多様な子ども文化及び学習形式の存在が確認された。遊びを含む文化要素とその学習（継承）を理解するために、異なる文化的・社会的・自然環境的状况における子どもの遊び実践を分析し、異なる継承のあり方に注意を払う必要がある。

本稿は、東アフリカの牧畜民マサイ社会において、世代をつないで実践され続ける遊びの実態を民族誌的な調査から明らかにする。対象となる遊びとは、マサイ社会で人々に“遊び (*enkiguran*)”と認識される活動の全般を指している。マサイは、ケニア南部とタンザニア北部のサバンナでウシ・ヤギ・ヒツジの放牧を営む牧畜民である。彼らは、長い歴史の中で牧草地と水源の季節的な変化に合わせて遊牧生活を営んでいた。20 世紀の後期から、土地利用政策の変化や近代開発、学校教育の普及などの影響を受け、マサイ社会では定住化が進行し、主に男性に見られる出稼ぎや、子どもの学校への入学が増加してきた。そのような変化の中、近年マサイの伝統文化を守るための一連の保全活動が展開されつつある。例えば 2016 年に、マサイ社会の男性の通過儀礼がユネスコの無形文化遺産として登録され、儀礼に用いられる歌や伝統遊戯などの記録や、それらを文化財として登録することによって次世代へ継承していく計画のもとに、関連する保全プロジェクトが展開されてきた (UNESCO, 2018)。そのほか、マサイの伝統スポーツと遊戯を利用した新しいスタイルの環境保全活動として、2012 年から「マサイ・オリンピック」が隔年で開催されるようになった。この「マサイ・オリンピック」とは、マサイの青年を対象

とした陸上競技会である。このイベントでは、マサイ青年の垂直ジャンプと槍投げが、マサイ文化を代表する伝統スポーツとして取り上げられた。主催者の野生動物保全団体は、このイベントを、ライオン狩りとも関連するマサイの槍投げなどの伝統スポーツを、現代スポーツ競技に昇華し、新しい文化的意味を創出することによって、ライオン狩りなどの“悪しき文化”の消滅に繋がるものとして評価している。一方、次世代への継承を重視するユネスコの無形文化遺産プロジェクトの中で、伝統スポーツと遊戯として捉えられてきたそれらのマサイの遊びと身体パフォーマンスが、儀礼以外の日常的な文脈でどのように実践されているのか、子どもの実践にどのように関わっているのかについての考察は不十分である。それらの疑問に向き合うためには、子ども期のマサイの日常実践からマサイ社会における遊びを理解する必要がある。

以上の問題を踏まえて、本稿は、マサイ社会における遊びとその継承に関わる特徴を、特に子ども期の経験に焦点を当てた民族誌的な調査によって明らかにする。具体的には、フィールド調査から得られた民族誌的なデータに基づいて、異なる世代の子ども期の遊び経験についての語りと実践を整理・分析する。それによって、子ども期の日常遊びの全体像を明らかにし、子どもが参加する遊びの特徴を生業活動との関係や、その内容と実践空間の特徴から説明する。さらに、世代間の遊び実践の異同を検討し、マサイ社会において文化要素としての遊びの継承について考察する。この章では、まず、これまでに記述された東アフリカ牧畜社会における遊びの記述と研究を概観し、文化人類学の分野における子どもと遊びについての論考を紹介する。

### 1.1. 東アフリカ牧畜社会の伝統遊戯

ケニア南部とタンザニア北部に広がる牧畜民マ

サイの遊びについての早期の記述は、植民地支配時代の19世紀末期に遡る。前述のようにそのほとんどが、植民地政府行政官や、スポーツハンティングや観光などの目的でマサイ・ランドを訪ねた白人冒険家や旅行者によって観察され、マサイの伝統と記述されたものである(c.f. Bale and Sang, 1996)。彼らは、マサイ社会を後進的・未開的な社会と見なしながらも、長距離を素早く移動するマサイの優れた身体能力や、マサイ青年が槍一本をたずさえておこなうライオン狩りに憧れを持っていた。例えば、1930年代、狩猟のために東アフリカを横断したヘミングウェイは、マサイについて、それまでに見たことのない完璧な運動神経を生まれつき持つ人々だと表現した(Hemingway, 1936)。彼をはじめとする多くの冒険家たちがマサイ・ランドで狩猟をし、銃を持たないマサイのライオン狩りの描写も含めつつ、アフリカの狩猟経験に基づく小説や新聞記事などをたくさん出版した。それらに基づくマサイの身体と文化に対する印象は、その後世界各地に広がり、マサイは優れた身体能力と勇敢さを持つ民族としてよく知られるようになり(Kasfir, 2007)、日本においても、そのような見方が広く受け入れられている。ここで注意すべきなのは、当時のヨーロッパで娯楽として捉えられていたスポーツハンティングはマサイにとって、必ずしも遊び(enkiguran)だと認識されているわけではない、ということである。上記のような記述はマサイの考えや行動を当事者の視点から理解するものではなく、記述側の都合によって解釈しているにすぎない。

マサイを含む東アフリカ牧畜社会における遊びを考察したものとして、アメリカの文化人類学者ポール・スペンサー(Spencer, 1986)による、ダンスについての民族誌的な研究が最も有名である。スペンサーは1950年代から、マサイ、及び同じく東ナイル系に属する牧畜民サンプル社会において文化人類学的な調査をおこなった。彼は、同じ

マー語を話すマサイとサンプル社会における遊び(enkiguran)として、通過儀礼や結婚祝いなどの集会の際に実践される、マサイの青年たちの垂直ジャンプのダンスと、それに合わせた歌を記録した。その際に、青年グループのパフォーマンスと同時に進行していた女性のダンスと歌も含めて、その内容や過程、参加者などの特徴を詳細に記述した。スペンサーは、それらの遊びの特徴を、東ナイル系の牧畜社会の年齢階梯制度と長老支配に関連づけて分析をおこなった。彼の調査で紹介された垂直ジャンプの身体的動きを持つマサイのダンスは、その後マサイの伝統遊戯として広く知られるようになり、本稿の冒頭で紹介したように、ユネスコの無形文化遺産に登録されたり、マサイ・オリンピックにおいて伝統スポーツとして解釈されたりするようになった。そのほか、近年はやりの体験型観光プロジェクトにおいては、「マサイ文化体験」の一環として、こうしたダンスが観光客と一緒に踊られるようになっている(中村, 2017)。

以上のように、これまでに記述されてきたマサイを含む東アフリカの牧畜社会における遊びは、欧米の冒険家や活動家によるものが多く、そのほとんどが欧米社会における遊びと余暇の概念理解に基づいていた。一方、民族誌的な調査は儀礼などの非日常的な実践を中心に考察を進めてきたため、マサイが自ら遊び(enkiguran)だと認識・実践してきた活動についてのわれわれの理解は、非日常的・儀礼的な意味を持つ実践のみに限定されている。そのために、垂直ジャンプや槍による狩りは、マサイの日常生活において、または彼らの遊び実践においてどのような位置付けと意味を持つのか、理解が不足している。また、ある実践を遊びだと認める場合に、それらはどのように世代を跨いで実践され続けてきたのか、についても同様である。スペンサーの論考では、日没後におこなった青年と女性のダンスについて、子どもたち

がじゃれあいながら参加した様子も記述された。これは、成人になるまでに、子どもたちが多種多様な遊びを実践しながら、垂直ジャンプなどの実践に周辺的に参加し、その身体的パフォーマンスを遊びから覚えるということの一例と言えよう。こういった経験を重ねてきたゆえに、成人になってすぐ、儀礼などの非日常的な諸場面において、その身体パフォーマンスを披露できるようになったのであろう。マサイ社会における遊びを理解するためには、子ども期の日常実践に目を向け、その全体像を理解した上で、それぞれの遊びに関する詳細な記述からその特徴を理解することが重要である。

## 1.2. 文化人類学における遊びと子どもの議論

文化人類学の分野における遊びの探求は、長い歴史を持っており、研究課題も多岐にわたる。これまでの研究は、人間活動や地域社会の特徴を解明するための重要な文化要素として遊びの役割を考察してきた。その捉え方は、古くから同様に遊びを対象とする哲学や心理学、動物行動学、教育学などの分野にも大きな影響を与えており、遊びの普遍性と地域性についての議論が分野を跨いで展開してきた。そのなかで、子どもと関わる議論は大まかに、人間の発達における遊びの学習的な役割を理解するための研究と、異なる民族集団における子ども文化の特徴を理解するための研究の二種類に分けられる。いずれにしても、遊びの内容や参加者の年齢、遊びの担う役割、社会関係などを民族誌的に詳細に記述することによって考察がなされてきた。以下は、それらの研究の一端をいくつか紹介する。

文化人類学における子ども研究の歴史は短い。遊びと子どもに関する記述は早期の民族誌にも多く記載されている。例えば、文化人類学の父とも呼ばれるタイラー (Tylor, 1881) は、弓矢を駆使する北アメリカの先住民社会において、弓矢の

絵を描けるようになった子どもに弓矢のおもちゃを与える事例や、槍を使うオーストラリアの先住民が、回転する輪に葦を投げ当てる遊びを子どもに教える事例などを記述した。彼は、社会の一員となるための知識と技術を学習する機会として遊びを分析し、その特徴を描いてきたのである。また、サモア社会におけるパーソナリティの形成と思春期についての議論で有名なマーガレット・ミード (Mead, 1928) は、子どもと大人が一緒に参加する踊りについて、少女の早熟な身振りや個々人の独創的な身振りに対する大人の賞賛的な態度に着目して、子どもの個性を伸ばすための遊びの教育的特徴を議論した。

同時期に、特に発達心理学と教育学の分野においては、人間の発達における遊びの普遍的な役割についての議論が増加した。それらの分野の研究者は、人間の子どものさまざまな遊びを通して身体能力や技術、社会関係、認知、情動、想像力などを経験的に学習していくと主張し、教育における遊びの重要性を提起した (e.g. Piaget, 1999; Vygotsky, 1967)。一方、人類学と異なると、それらの分野の早期の研究のほとんどが欧米の工業先進国において実施されたため、欧米社会で観察できた大人から子どもへの知識の教授方法の特徴を世界で共通するものとして捉えていた (Henrich et al., 2010)。どういった子ども期における遊びの普遍的な役割に関する議論と学習形式の認識は、その後、世界各地で展開される学校教育に大きな影響を与え、教育プログラムに遊びを用いた教授法は現代においても通用している。

1960年代から、文化人類学の分野における子どもと遊びの研究は、発達心理学などの分野における普遍的な発達論に疑問を投げかけながら、異なる文化的・社会的状況における多様な子どもの遊びとそのプロセスにおける多様な学習の特徴を考察してきた (Roberts and Sutton-Smith, 1962; Sutton-Smith, 2001; Whiting, 1963; Schwartzman,

1978)。一方、多くの研究者が指摘したように、それまでに子供を対象にした文化人類学の研究の多くは文化を不変的な存在として捉えていたため、子どもがただ既存文化を学んでいくという固定的な認識に基づいていた (c.f. 高田, 2019)。そのような発想によって、文化の特徴を見出す議論において子どもの役割が周辺化させられたゆえに、文化がどのようにして生まれ、維持・変化していくのかについての理解が不明瞭となっていたのである。2000年代になると、子どもを対象にした文化人類学の研究は、子どもの日常活動を文化生成のプロセスとして理解し、その役割を再考察する研究が急増した。サブサハラ・アフリカの子どもについては、子どもの生業活動への能動的な参加 (Spittler and Bourdillon, 2012; 清水・亀井, 2017) や、遊びを通した子どもの生業貢献 (e.g. Crittenden, 2016; Gallois et al., 2015), 遊びにおける大人の不参加と教授の不在 (亀井, 2012; Lancy, 2010) など、欧米社会や日本などの先進工業国と異なる子ども期の文化的特徴に多くの関心が寄せられてきた。また、以上のような研究展開によって、西欧社会以外の多数の地域社会において、子どもたちが学校あるいは大人からの明確な指導に頼らずに遊びを実践していることが明らかになった (Lancy, 2015)。ユネスコが提唱する伝統スポーツと遊戯の継承を考える際にも、そのような欧米社会と異なる子どもの遊び参加と社会化の特徴を考慮することが重要である。

## 2. 調査地と調査方法

本稿の現地調査は、ケニア南部のカジアド県 (Kajiado County) の東に位置するマサイの I 村で実施した (図 1)。この村は二つの国立公園 (チユル・ヒルズ国立公園と西ツァボ国立公園) と近接しており、この地域は乾燥・半乾燥のサバンナ気候に属している。乾季 (1～2月, 6～10月)

と雨季 (11～12月, 3～5月) のおおまかに 2つの季節を持つこの地域には、棘を持つアカシア科の低木が点在する草原地帯や、灌木林と中密度林を持つ溶岩地帯が広がっている。年間降水量は 200～500mm となっているが、季節によって降水の変化が激しく、干ばつも頻発しているため、農耕に適さない。研究対象となるマサイは、そのような自然環境的な制約を受けて、標高の低い草原地帯に定住の拠点となるホームステッドや町を設置しながら、牧草地と水源の季節的な変化に合わせて、広範囲にわたってウシ、ヒツジ、ヤギの放牧を営んでいる。

1960年代まで、調査地のマサイは遊牧生活を送っていた。その後、ケニアの独立 (1962年) にともなう土地利用政策の変化によって、マサイは徐々に定住しはじめた。1980年代から、農業と観光業に注力するケニア政府の近代開発計画と、上記の二つの国立公園の設立によって、調査地では土地の私有化が進み、同時期から、キリスト教の布教及び学校教育の普及によって、若者の就学率の増加など、生活慣習の変化を経験してきた。さらに、2009年の大干ばつの際に、多くの



図1 調査地 I 村の所在

家畜を失ったマサイは、牧畜を継続しながらも、自然環境と社会の変化に対応するため、観光や商売などにも積極的に関わるようになってきた。そのような変化が常に起こってきた環境のなかで、家畜と人びとの強いつながりは、子ども期からの生業参加によって継続して育まれてきたものの、世代によっては子ども期の経験に差が生じている。本調査が実施された2015年には、村にいる学齢期の子どもの就学率が80%を超えており、親世代は、子どもたちの就学を積極的に支えている。就学の支持については、牧畜以外の仕事が干ばつなどの災害が起こる際に、家族と家畜を守るためのもう一つの選択肢ともなるからだと述べる人々が少なくない。本章はまず、マサイの年齢体系、生業分業、及びI村での子どもの活動の展開と関わる生活空間の認識と利用について紹介し、データ収集と分析の詳細を説明する。

## 2.1. ケニア南部のマサイと彼らの暮らし

本稿の対象となるマサイの子どもと大人の区別は、マサイ社会における年齢体系の区分に従う。マサイ社会の年齢体系には、時間軸の移行によって変わっていく年齢階梯 (age grade) とそのプロセスで男性グループ中心に形成していく年齢組 (age set) の二つの概念がある。この年齢階梯によって、割礼を受ける前の男女は全て子ども (*inkera*) と認識される (Spencer, 1993)。割礼は10代後半になってから受けることが多いが、日本の成人式のようにマサイにとっての割礼は大人になるための重要な儀礼である。割礼を受けた10代後半から20代後半の青年男性たちは、一つの年齢組を形成し、同じ年齢組に属する人々は強い繋がりを持ちながら15年ほどの青年期を共に過ごす。次の年齢組が形成される時点で、青年たちは青年期から卒業し、長老の時代に入る。女性の場合は、女性の年齢組を形成しないが、割礼を受けて大人になると同時に結婚し、夫の年齢組に属するのが一般的であ

った。21世紀から、女性の就学と社会進出の増加や、女性割礼の倫理的な議論と反対活動などの展開によって、割礼を受けない選択肢を選ぶ女性も増加してきた。I村でも、そのような少女の場合は、10代前半までは子どもとして扱うことが多いが、10代後半になると大人として接される場合が多い。また、そのような年齢体系による生業分業が顕著なため、子ども期から成人時代に入った途端に、日常活動の内容と活動空間に大きな変化が見られる。以上のようなマサイ社会における子どもと大人の区分を参考に、本稿では男女とも10代前半までは子ども、10代後半からは大人として扱う。

マサイ社会では、性別と年齢による生業分業が顕著であり、生業活動に類する日常活動 (*esiai*) は、遊びに類する日常活動 (*enkiguran*) とはつきり区別されている。生業 (*esiai*) において、男性は牧畜と関わる活動を中心に参加するが、割礼を受ける前の少年は日帰り放牧、割礼を受けた後の青年は遠距離放牧や、水源・放牧キャンプの管理、長老になった男性は家畜の売買及び水源や牧草地の利用分配を中心に、それぞれ異なる役割を担っている。少年たちは子どもでありながらも6歳からは遠距離移動が必要となる日帰り放牧へ出かけるようになり、10歳からは自分たちだけで100頭以上の家畜を家から10km以上も離れた牧草地へ連れて行けるようになる (Tian, 2016)。女性の場合、少女たちは幼い時期から成人女性の家事を手伝い、10歳ほどになったら薪採集や、家族全員分の料理、掃除、兄弟と親の洗濯などを独自でおこなえるようになる (Tian, 2017)。成人女性になると、子どもへの家事の分担、および食事の分配の権利を持つようになるほか、家づくりとその修繕も担うようになる。このように、子ども世代が社会の一員として、大人と異なる役割を担って生業活動に貢献することは、マサイを始めとする東アフリカの牧畜社会の大きな特徴である (Grandin,

1991; Spittler, 2012)。

調査地の I 村のマサイは、町や国立公園などの存在を意識しながらも、行政上の土地区分とは異なる土地認識を持っている。彼らの生活空間は主にホームステッドと訳される人間と家畜の家周りの空間 (*ang*) と、その周辺に幼獣の放牧地として保留された空間 (*aulo*)、野生動物が暮らす放牧地や自然資源が得られる非居住区 (*osero*) の三つからなる。国立公園も非居住区 (*osero*) の一部と認識されているため、乾季の放牧に適する牧草地が公園内にしか残っていない年には、家畜の生存のため、その利用をめぐる政府と粘り強く交渉する場面もしばしばあった。調査地の子どもたちは、性別と年齢によって、異なる生活空間で日常を過ごしている。6 歳以下の幼い子どもたちは幼獣の世話をするため、主に、家周りの空間 (*ang*) とその周辺の幼獣が放される空間 (*aulo*) で日常を過ごす。成長につれ、子どもたちが関わる生業活動が変化し、生活の空間も、家からさらに遠く離れた牧草地や薪の採集のできる非居住区 (*osero*) まで拡大していく。遊びが生業活動の合間に実施される場合が多いため、子どもたちが関わる生業活動の空間は遊びの空間ともなっており、マサイ社会に確認できた子ども期の日常遊びには彼らの生業参加の特徴が反映されている。

## 2.2. データ収集と分析

分析に用いられる遊びのデータは、主に 2014 年 11 月から 2015 年 2 月までの 4 ヶ月間（雨季と乾季それぞれ 2 ヶ月）のフィールド調査によって収集したものである<sup>(1)</sup>。マサイの子ども期の遊びを理解するため、主に学校外でおこなわれていた子どもの遊びに対する参与観察と大人世代の子ども期の遊びについての聞き取り調査の両方から、データ収集をおこなった。まず、同じホームステッドに暮らす 2 歳から 11 歳の子ども 13 名（少女 4 名、少年 9 名）を選び、それぞれを対象にし

た追跡調査をおこなった。少年を少女より多めに選んだのは、6 歳から放牧へ出かける少年の活動は、家とその周辺で過ごす幼い子どもと比べて、個体の差異が大きいためである。それらの調査の中で、即興でおこなわれた遊びについては瞬間サンプリング法 (Altmann, 1974) を用いて、その詳細をフィールドノートや写真、ビデオ撮影によって記録した。データ収集の際は、具体的に、遊びの内容・参加者・場所・時間を記録した。また、それが遊びかどうかの判断については、当事者の子どもたちに任せて、マー語で遊び (*enkiguran*) だと教えてもらった活動だけ本稿では遊びとして取りあげた。次に、大人の子どもの遊び経験を調べるために、10 代後半から 80 代の大人 80 名（男女各 40 名、各年齢帯それぞれ 5 名）を対象に聞き取り調査をおこなった。その際には、遊びの内容、場所、時間帯の詳細について確認した。語りだけで説明しづらい遊びについては、砂地で描いてもらったり、一緒に遊びながら再現したりして、記述をおこなった。

次章では、まず、本研究で収集できた子どもの遊び実践と大人が語った遊びを概観する。そして、通世代の遊びの内容と特徴を分類によって説明し、世代・性別によって実践された遊びの特徴を整理する。以上の作業によって、マサイ社会に見られる遊びの特徴を、その社会に特有の性別による生業分業や、近代的発展、学校教育の普及などの時空軸の変化と関連づけて検討する。

## 3. マサイ社会における遊び

前章で述べた調査によって、マサイの子どもからは 286 例、大人の語りからは 117 例の遊びを収集できた。子どもと大人から収集した全ての遊び事例から重複したものを取り除いて、合計 85 種の遊びを確認し、それぞれの内容を表 1 にまとめた。また、観察できた子どもの遊びの 286 例か



ら、参加者の人数と性別の特徴を整理した(図2)。参加者の大きな特徴については、まず、大人が子どもの遊びに交じることがないという点が挙げられる。観察できた全ての遊びの事例では、仮に大人が同じ空間にいても、子どもの遊びに参加することがなかった。また、三分の二近くの遊びは集団でおこなっており、男女別でおこなう遊びも多くあることがわかった。一人遊びの事例には、少年が単独で放牧へ出かける際におこなわれたものが多かった。また、少女だけの遊びが少年より少ないのは、彼女らがよく幼い子どもの世話

をするため、幼い少年たちを連れて遊ぶことも多かったためである。そのような遊びにおける参加者の特徴は、子どもの生業参加と強く関わっているといえよう。この点についてはさらに遊びの内容から詳細に見ていきたい。

表1に挙げた85種の遊びを、さらにそれぞれの遊びの中心的なモチーフ(c.f. 亀井, 2012)によって分類をおこなった(表2)<sup>(2)</sup>。具体的には、生業を含む社会活動を真似・再現して、参加者それぞれが特定の社会的役割を担いながら進行する遊びを「ごっこ遊び」とした。また、身体を用い

表1 収集できた遊びの詳細(遊び類の番号は本稿の全ての表と一致する)

No.	内容(道具)
1	家づくり*:少女中心の遊びである。母親になる少女がミニチュアサイズの小屋を作って、中に台所と寝室を作る。母親役が台所で料理をするふりをする間に、子どもはそれを観察したり、寝て待ったり、放牧へ出かけたりして、実際の仕事分担を真似る/再現させる。 建築材料:石、小枝、ウシかゾウの糞 食材になるもの:小石や砂、草、木の実、水、コメ、トマト、玉ねぎなど 料理道具:ボトルのキャップ、ビニール袋、廃棄された容器
2	放牧ごっこ:少年中心の遊びだが、家づくりと同時に遊ぶことが多かった。放牧キャンプ、水場、放牧ルートを作って、放牧のシミュレーションをする。遊ぶ際に、実際の仕事分担を真似る/再現させる。 放牧キャンプ/放牧地の材料:砂、草、小石 家畜になるもの:乾燥したキリンのフン、植物の実
3	搾乳ごっこ:ボトルのキャップに小さな穴を開けて、ボトルに水を入れたらキャップを閉める。搾乳の動きでボトルの水を穴から押し出す。とれた乳をお互いに分配する。 道具:空きボトル
4	妊娠・出産ごっこ:植物の実・石を腹部の服に入れ隠して、つわりやゆっくりした歩行など妊婦の真似をする。赤ちゃんを出産したら服を着せて、乳を飲ませて、おんぶする。 道具:バオバブの果実、石
5	授業ごっこ:授業中の先生と生徒のやりとりを模倣する。英語、歌、算数、国語などの授業の様子を再現する。 教鞭:杖、教室:石で囲まれる四角い空間
6	体罰ごっこ:先生役と生徒役に分かれ、体罰の様子を真似る。先生は学生の衛生状況や、宿題の完成度、課題の理解度などをチェックする。学生は意図的に手を汚し、宿題を忘れ、課題を理解しないなど、悪い行動をする。先生は、悪い学生を一行にして、順番に、手の裏やお尻を打ったり、耳を引っ張ったり、競走をさせたり、家まで走って帰らせたりして体罰する。参加者は順番に先生になる。 道具:放牧用の杖、小枝
7	割礼ごっこ:割礼を受ける青年、施術する長老/医者のやりとりを真似る。青年は程度が違う痛みの身体表現を真似る。長老の場合、素早く施術し、青年の我慢強さを優しく褒める。医者は痛みを感じさせないように麻酔の注射をしてからゆっくり施術する。青年は麻酔でしばらく移動できない。 道具:杖、砂、服
8	教会ごっこ:教会を作って、牧師、音楽隊、信徒のやりとりとパフォーマンスを真似る。時に、募金もする。 教会の壁となるもの:石と乾燥したゾウ糞 楽器となるもの:長めの棒、葉っぱ、廃棄された容器
9	立ったまま休憩中のウシを跳び超える。
10	ロバ、鶏、犬を追いかける。 大人の語りに、鶏、犬が出ていなかった。鶏については、調査地のマサイが鶏を飼い始めたのはここ20年ほどのことであるためだ。また、犬は家畜を害獣から守る、狩猟に使う動物と認識する大人は、犬を追いかけはけないと考えている。
11	走るウシのしっぽを掴んで一緒に移動する。
12	家畜(ヤギとヒツジ)に乗る、追いかける。 種ウシに乗って、川を渡る。
13	放牧途中に、雌ウシの乳を飲む。
14	ひもを作って、放牧中、仔ウシを捕まえる競争をする。

15	放牧途中に、種ウシを戦わせる。
16	放牧：成人女性が遊びと認識したが、遊びではなく、男の仕事だと反論する成人男性と子どもが多い。
17	放牧途中に、シマウマやキリン、ガゼルなどの草食動物を追いかける。
18	狩猟遊び：ウサギ、トカゲ、ガゼルなどの野生動物を追いかけて狩る。時々犬を使う。成人男性はキリン狩りも言及した。捕まえた動物を食べたり、耳や体にマークをつけて逃したりする。
19	鳴いている鳥と会話するように鳴く真似をする、鳥の巣を打つ。
20	放牧途中に見かけたゾウやバッファロー、サイ、ライオンなどの危険な野生動物を追いかけて、勇敢さを示すために怒らせて、対峙する。
21	羽集めのための鳥狩り：成人式の一環として、鳥から羽を集めて頭飾りを作る。まろやかな色を持つ羽を集めるための狩りであるが、鳥を殺してはいけない。
22	棘遊び：棘を使って、トマトの皮を均等に割って剥く、長い棘を使って靴裏に刺さった短い棘を取る。
23	放牧中か薪採集の途中に、野生の果物を採集して食べる。
24	異なる樹種から枝をとって杖を作る。
25	花をとって、中の蜜を吸う。
26	木登り：木に登って、高い枝から飛び降りる。高い枝にしばらくぶら下がってから飛び降りる。木に登って、太い枝に座って、車あるいは船に乗る真似をする。
27	木でブランコ：参加者の服を長く結んでひもにする。その両端を高い枝に固定してブランコにする。小さい子から順番に結んだ服に乗って揺れる。(遊ぶ仲間からまず、丈夫な服を選ぶ)
28	薪採集：成人女性が挙げた遊び例だが、遊びではなく、女性の仕事だと認識する大人と子どもが多い。
29	異なる樹種から樹脂を採集して、ガムとして噛む。
30	蝶々を追いかける。(放牧用の杖)
31	カプトムシを戦わせる。
32	長い棘を使って、ダニを刺し殺す。(棘の樹種 ( <i>Vachellia tortilis</i> (Forssk.) Galasso & Banfi))
33	飛んでいる甲虫類を打つ (放牧用の杖)、手で昆虫の足を掴んで揺らしながら飛ぶ音を聞く。
34	サソリを探して殺す。(石、サンダル)
35	アリの巣やアリの行動を観察し、時に、アリの群れの進行方向を変更させる。
36	火を起こして、煙で巣のハチをおとなしくさせて、はちみつをとる。
37	川沿いで泥遊び：泥で叩き合う、泥で家畜を作る。
38	雨の中で高くジャンプする、走り回る。
39	川で泳ぐ、潜る。
40	放牧休憩中に、火を起こす。(燃料：乾燥した枝、葉っぱ、ウシやゾウの糞など)
41	高・遠投げ競争：片手で放牧用の杖を高く/遠く投げて、競争する。
42	標的杖投げ競争：片手で放牧用の杖を事前に決められた標的(木の枝や地面の石、葉っぱ)に投げ当てて競争する。この遊びはライオン狩りの練習や、恋占いの一種としても認識されている。恋占い：好きな少女の名前を思い浮かべ、標的に向かって投げる。当たったら、その少女は将来自分の妻になると信じる。
43	標的石投げ競争：小石で、標的(空き缶、果物、ほかの石、ウシの角、鳥など)に当たるように投げて競争する。
44	ウシの真似：仔ウシ、種ウシ、雌ウシ、去勢ウシそれぞれの動きを真似する。種ウシを真似して、闘ウシする。一緒に移動してウシ群を真似し、放牧の牧童とウシの動きを細かく再現して遊ぶ。 具体例：家畜を水場へ連れていく真似遊びである。参加者全員のなかから一人が牧童、一人が青年男性、一人が種ウシの役になり、ほかの子どもたちは雌ウシと仔ウシになる。ウシ群になる子ども全員は四つんばいになりながら、ウシの声を真似して叫ぶ。種ウシは群の一番先頭に立つが、ときにほかのウシを追いかけてたり、同じ群れにいる種ウシと戦ったりして移動する。仔ウシは種ウシを避けながら母親の後ろについて移動するが、雌ウシは種ウシの動きを観察しながら仔ウシと一緒に移動する。種ウシは牧童に対して大きな声で叫びながら、後ろ足を高く蹴り出して悪い態度を示すが、青年が近づいたらおとなしく移動する。水場に近づくと、ウシ群は急いで水場へ移動するが、青年は水場にいる成獣たちを杖で叩きながら、順番に水を飲ませ、仔ウシたちは、牧童と一緒に順番を待つ。
45	挨拶遊び：相手に地面にあるものへ注意を向けさせた瞬間に片手で相手の後頭部を触って、大人の挨拶の真似をする。マサイ社会の挨拶は上下関係によって形式が決められており、子どもから大人への挨拶には、子どもが頭を下げ出して、大人が頭を撫でるまで待つ慣習がある。
46	組んだ手を切る遊び：二人で一組になる。一人が両手の指を強く組んで相手に出す。もう一人は片手を使って、相手が組んだ両手を切り離す。
47	歌とダンス：マサイの伝統的な歌とダンス。 大人たちによると、幼い時期に、日没後になるとよく青年たちが住んでいるボマ(家)に入って、青年たちと一緒に伝統的な歌とダンスをしていた。
48	教会、学校の歌とダンスで兄弟と一緒に遊ぶ。
49	追いかけてこ：放牧(少年中心)や薪採集(少女中心)の際に遊ぶ
50	服の先端を硬く結んで相手の背中とお尻を当てるように叩き合う。時に、杖や太い草茎や乾燥したウシ糞などを使って、相手を攻撃する。

51	鉄で作られた槍の先端を片手で握って、ゆっくり持ち上げる。
52	棘を持つ低木植物/家畜囲いの柵を跳び越える競争をする。
53	高跳び：水平に持ち上げられた杖を跳び越える競争をする。
54	遠跳び：放牧用の杖二本を水平にして、その間に距離を空ける。遊びに参加する子どもたちは、まず一本の杖をスタート地点とし、その棒のところから、もう一本の杖を跳び越える。
55	鳥跳び：ウサギ跳びのように、膝を深く曲げてしゃがんで跳びながら移動する。
56	木のない小山から滑りながら降りる。
57	縄跳び：植物の茎や薪集めのひもで縄跳びをする。
58	遊び相手の耳にピアス穴を開ける。自分の体に、特に太ももと腕にタトゥーを入れる。
59	かくれんぼう (Tiit 1): 家畜が放牧から戻って、搾乳も終えて、休んでいるタイミングで、あるいは日没後に遊ぶ。この遊びは、二つのバージョンがあり、一つ目はライオンとヒツジになる遊びである。まず、ライオンになる子どもを一人選ぶ。残りの子どもたちはヒツジになる。ライオン役は1から10まで大きな声でゆっくり数える。その間に、ヒツジ役の子どもたちが休憩している家畜群に隠れる。家畜が移動したらヒツジたちも静かに移動し隠れ続ける。ライオンは数え終えたらヒツジたちを探しに行く。その間に、ヒツジたちは家畜を移動させるなどの工夫をして、家畜囲いの外へ移動する。全員が捕まえられずに家畜囲いの外へ移動できたら、ライオンの負けになる、途中ライオンに捕まえられたヒツジは次のゲームでライオンになる。
60	かくれんぼう (Tiit 2): 上記のゲームの二つ目のバージョンで、マサイの青年とライオンになる遊びである。ライオンになる子どもを2、3人の強い少年を選び、ほかの少年たちは青年になる。青年役は、自分の服の一端に結び目を作って「槍」にする。ライオンたちは休憩している家畜群に隠れる。その間に青年たちは1～10まで数えて、終えたらライオンを探しに行く。ライオンたちはまず個別で行動する青年を襲って槍を奪う。全ての青年の槍を奪ったらライオンチームの勝ちになる。
61	かくれんぼう：午後の搾乳後、同じボマ（家）に暮らす既婚女性それぞれの台所でかくれんぼうする。
62	ライオンとヤギ：全ての参加者のうち、一人はお母さんヤギ、もう一人はライオン、残りの子どもたちは仔ヤギになる。地面に大きめの円を作ってライオンの家にする。ヤギたちはまずライオンの家にいる。ライオンは円の隣に仔ヤギたちが逃げないように見守る。お母さんヤギは2から3メートル離れたところで立つ。彼女がいる場所にライオンが来てはいけない。お母さんヤギが準備できたら、まず、歌を歌いながら仔ヤギ役の名前を一人ずつ呼ぶ。呼ばれた仔ヤギはライオンの家から順番でお母さんヤギの方へ逃げる。ライオンに捕まる前にお母さんヤギに触ったら逃げるのに成功したとする。全員が逃げられたらヤギ親子の勝利になる。ライオンが仔ヤギを捕まえたら、捕まえられた子どもから新しいライオンを選んで遊ぶ。
63	石玉ゲーム：お手玉と類似する遊びである。
64	炭隠し：複数の子どもに対し、一人がほかの子たちに見えないように、炭を片手に隠す。ほかの子たちにはどちらの手に炭があるのかを当ててもらう。日没後に夕飯を待ちながらの遊びで、順番に炭を隠していく。
65	腕埋め遊び：牧童から一人を選ぶ。選ばれていない牧童たちは地面に穴を掘って、選ばれた牧童の片方の腕をしっかりと埋めたら、彼から離れる。腕が埋められた牧童はまず10まで数えてから、自力で埋められた腕を出して逃げる。この遊びは、特に放牧の途中に、野生動物がよく出没する場所を選んでおこなう。ほかの牧童が離れると、危険な野生動物が出る可能性が高くなるので、腕をなかなか出せない場合は危険がともなう。
66	縛るゲーム：まず、二人が一组になって背中を合わせて、服で相手の両手を動かせないように強く縛る。二人とも縛られたら、すべての参加者が結び付くようにさらにお互いに縛り続ける。すべての参加者の服が結び付いたら完成である。
67	人食いライオン：一人の子どもがライオン役になって、ほかの子どもたちから離れた場所で巣を作って待つ。残りの子どもたちは円になって目を閉じ、地面に横になって寝るふりをする。ライオンは全員が寝た後に、寝た子どもから一人ずつ足を引っ張って自分の巣に引きずっていく。ライオンは自分で決めた順番ですべての子どもを自分の巣まで引きずる。その間に、引きずられた子どもを始め、誰かが目を開いたら、あるいは笑ったら次のライオンになる。
68	ホップスコッチ：砂地で格子を作って、両足をマスに合わせて開けたり閉じたりしながら、ジャンプして通る。
69	ビーズの色を当てるゲーム：相手に見えないように、片手の裏に一色のビーズを隠す。相手はビーズの色を当てる。
70	荷造り遊び：ひもを作って、砂を入れたビニール袋を異なる方法で結んで締める。
71	おもちゃづくり（ローリングキャップ）：ボトルのキャップの中心に小さな穴を開けて、長いひもを二重にしてから穴を通し、両端を結ぶ。遊ぶ際には、紐を両手にかけてキャップを円のように回しながら紐を巻く。ある程度巻いたら、両手にかけた紐をまっすぐになるように力強く引っ張って、キャップを回す。
72	おもちゃ作り（車）：空き缶、キャップ、植物を使って車を作る。
73	ボール作り・遊び：廃棄する靴下に乾燥した草・ウシやゾウの糞をたっぷり詰める、形を丸くしてから紐で結んでボールにする。遊ぶ際には、参加者は二つのチームに分けて、キャッチボールをする。学校に通う少年たちは、サッカーで試合する。ボール遊びを挙げた成人のうち、全ての女性が20代の若者だった。彼女らは学校の体育授業で学んだボールゲーム（バスケットボール、バレーボール、フットボール）を中心に語った。
74	ビーズ飾り作り：成人女性によると、自分たちが少女だった頃には、ビーズを作って好きな青年にプレゼントしたという。また、少年からの弓矢攻撃（遊び例76を参照）の対策として、ビーズでプレスレットやネックレスを作って少年たちへプレゼントする。しかし、子どもへの参与観察では、好きな男性のためにするビーズ作りは少なかった。
75	人形作り：ウシ糞、土、水を混ぜて、種ウシの泥人形を作る。また、それを闘わせる。
76	自作の弓矢（棘や枝で作る）で、森に出かける少女を襲う。
77	スリッパ遊び：大人のスリッパを履いて歩き方を真似する。
78	洗濯遊び：洗濯している大人を観察しながら、自分の服、手、足、体を同じ水で洗う。
79	日没後に、大人から昔話を聞く、子ども同士でお互いに語る。

80	占い遊び：ヨダレを片手の裏に乗せて、もう片手の人差し指と中指を使って、力強くヨダレを一回叩く。ヨダレが飛ぶ方向は迷子になった家畜のいる方向になる。
81	呪い遊び：ノミを捕まえて太陽の方向へ力いっぱい投げる。そうすると、太陽が早めに沈むという。太陽への呪いになる。放牧の際に遊ぶ。
82	小さい棒や棘で砂地に絵を描く。
83	放牧途中に口笛を吹く。
84	料理を作る女性に歌を歌って、ミルクをねだる。
85	水汲み：成人女性が挙げた遊び例だが、遊びではなく、女性の仕事だと認識する大人と子どもが多い。

\* 全ての遊びにおいて、時間帯を明記していないものは主に日中におこなわれた。

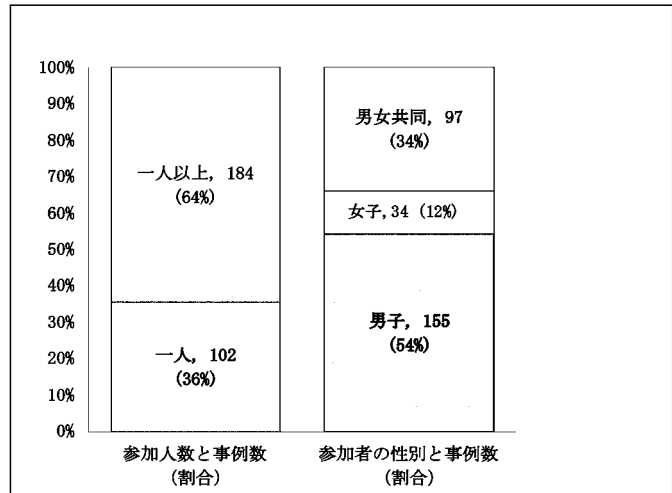


図2 観察できた子どもの遊び事例における参加者の人数と性別の特徴



図3 棘で作られた弓矢



図4 ウシとゾウの糞を壁にして、家づくり

て家畜と直接に関わる遊びを「家畜との遊び」に分類した。家畜の行動を自らの身体を用いて真似・表現する遊びは「身体遊び」に分類した。同じように、野生動物や昆虫、植物などの自然要素と関わる遊びを「自然遊び」に分類した。なお、低木を飛び越えるなど、遊びの当事者は植物と直接に関わりながらも、遊び自体の目的は障害物を飛び越えるという身体的パフォーマンスに焦点を置い

てある場合、「身体遊び」に分類している。以下にマサイの子ども期の遊びの特徴を、遊びの内容、道具と空間から説明する。

### 3.1. マサイの子ども期の遊びの特徴

観察できたマサイの子ども期の遊びは、主に「ごっこ遊び（8種）」、「家畜との遊び（9種）」、「自然遊び（24種）」、「身体遊び（18種）」、「ルール

表2 収集できたマサイの子ども期の遊び

ごっこ遊び		家畜との遊び		自然遊び（野生動物関連）		
1	家づくり	u	9 跳び越え	o	17 追いかけ（草食動物）	u/o
2	放牧ごっこ	u	10 * 追いかけ	g/u	18 狩猟（小型草食動物）	o
3	搾乳ごっこ	u	11 * しっぽ掴んで移動	u/o	19 * 鳥鳴きまね、巣を打つ	o
4	妊娠・出産ごっこ	g/u	12 * 乗る	o	20 * 害獣の追いかけ・対戦	o
5	授業ごっこ	u	13 * 乳飲み	o	21 * 羽集めのための鳥狩り	o
6	体罰ごっこ	u	14 * 捕まえ競争	o		
7	割礼ごっこ	u	15 * 闘ウシ	o		
8	教会ごっこ	u	16 ** 放牧	o		
自然遊び（植物関連）		自然遊び（昆虫関連）		自然遊び（その他）		
22	棘遊び	g	30 追いかけ（蝶々）	u	37 * 泥遊び（川沿い）	u/o
23	野生果実採食	u/o	31 戦わせる	g/u	38 雨にジャンプ	u/o
24	* 杖作り	u/o	32 ダニ殺し	u/o	39 * 泳ぐ・潜る（川）	o
25	* 花の蜜採食	u	33 打つ・羽音を立たせる	o	40 火起こし	u/o
26	木登り	u	34 * サソリ狩り	u		
27	木ブランコ	u	35 アリ観察	u		
28	** 薪採集	u/o	36 はちみつ採食	g/u		
29	樹脂採食	u/o				
身体遊び		ルールを持つ遊び / ゲーム		物作り		
41	* 高・遠投げ競争（杖）	u/o	59 かくれんぼう（Tiit 1）	g	70 ** 荷造り	g
42	* 標的投げ競争（杖）	u/o	60 * かくれんぼう（Tiit 2）	g/o	71 おもちや（キャップ）	g/u
43	* 標的投げ競争（石）	u/o	61 ** かくれんぼう（台所）	g	72 * おもちや（車）	g/u
44	家畜の真似（ウシ）	g/u	62 ライオンとヤギ親子	g	73 ボール作り・遊び	u
45	挨拶遊び	g/u	63 石玉ゲーム	all	74 ** ビーズ作り	g
46	手を切る遊び	g/u	64 炭隠し	g	75 * 人形作り（ウシ）	o
47	歌とダンス（マサイ）	g/u	65 * 腕埋め遊び	o	76 * 弓矢（棘・枝）	all
48	歌とダンス（学校 / 教会）	g/u	66 縛るゲーム	g		
49	追いかけっこ	all	67 * 人食いライオン	g		
50	叩き合う	all	68 ホップスコッチ	g/u		
51	槍の持ち上げ	o	69 ** ビーズ色当て	g		
52	障害物を跳び越え	u/o				
53	* 高跳び（杖）	o				
54	* 遠跳び（杖）	o				
55	鳥跳び	u				
56	山から滑り	u/o				
57	** 縄跳び	u				
58	ピアス / タトゥー	g/o				
					その他	
					77 スリッパ遊び	g
					78 洗濯遊び	g
					79 昔話	g
					80 * 占い遊び	o
					81 * 呪い遊び	o
					82 お絵描き（地面・身体）	g/o
					83 * 口笛	u/o
					84 乳ねだり	g
					85 ** 水汲み	g

英語表示は、それぞれの遊び例が行われた場所を示す。

g: 家 (ang) ; u: 家の周辺・幼獣の放牧地 (aulo) ; o: 非居住区・放牧地・森 (osero)

\*: 男性だけの遊び例

\*\*: 女性だけの遊び例

を持つゲーム遊び (11 種)」、「物作り (7 種)」、「その他 (9 種)」の七種類である (表 2)。そのなかでは、「自然遊び」がかなり豊富であり、マサイは子ども期から遊びを通して野生動物や植物、昆虫、水、土などあらゆる自然要素と関わっていることがわかった。「自然遊び」のほかは、「身体遊び」も多く実践されている。特に、本稿の冒頭

で紹介したマサイの伝統スポーツとしての青年の垂直ジャンプのダンスと槍投げは、身体を用いた遊びに属す「杖投げ (No.41,42)」、「石投げ競争 (No.43)」、「歌とダンス (No.47)」、「杖を用いた高飛び (No.53)」と類似している。また、以上の分類と関係なく、「放牧ごっこ (No.2)」や「搾乳ごっこ (No.3)」、「家畜に乗る (No.12)」、「種ウシを

戦わせる (No.15)」、「ウシの真似 (No.44)」、「家畜の群れにかくれんぼう (No.59, 60)」などの多くの遊びは家畜・牧畜活動と関連しており、子どもの性別と年齢による生業活動への参加の特徴をよく反映している。

### 3.1.1 自然・家畜・身体と関わる遊びの特徴

幼い時期から家畜管理などに関わるマサイの子どもは、生業活動とは異なるアプローチで野生動物や植物、昆虫などさまざまな自然的要素と、遊びを通して関わっている。表1の「自然遊び」とそれに属さない遊び、例えば、杖を用いた投げ競争 (No.41, 42) や家庭庭棄物と木の枝や草を利用したボール作り (No.73)、棘や枝での弓矢作り (No.76) などには、多くの自然的要素が活用されている。「身体を用いた遊び」のほとんども自然環境の中でおこなわれており、子どもたちは成長とともに身をもって自然環境との関わりを深めている。表2に示されたように、少年たちがよく実践する杖と石投げ遊び (No.41, 42, 43) と、跳び遊び (No.53, 54) は、非居住区の放牧地と森での少年主体の放牧と家畜管理の合間におこなわれる場合が多い。少年たちが生業活動を通してそれらの場所の生態環境を熟知するようになる中で、樹種の特徴 (例えば、棘の形と硬さ、枝の弾力と重さ) や野生動物の生息の有無 (例えば、足跡や排泄物などの確認) についての知識は、遊びを通して、身をもって蓄積してきたといえよう。

「自然遊び」と「身体遊び」のほか、家畜と関わる遊びが多いことはマサイの子ども期の遊戯のもう一つの大きな特徴である。「家畜との遊び」以外にも、実際に多くの遊びから、子どもと家畜の関わりが観察された。例えば、「放牧ごっこ (No.2)」では、牧畜キャンプ作りや放牧、家畜の給水、病気治療など、牧畜と関わる仕事が再現されている。「家畜の真似遊び (No.43)」では、子どもたちは家畜の身ぶりや感情を自ら身体を使って表現する。また、「かくれんぼう (No.58)」の遊び

では、子どもたちは家畜の群れに隠れる。上手に隠れるには、子どもたちは休憩中の家畜の動きと機嫌をよく観察しながら、それに合わせて移動しなければならない。こうしてかくれんぼうをすることによって、子どもたちは放牧などの生業活動とは異なるアプローチでそれぞれの家畜との繋がりを深めている。そのほか、大人の語りにしか出なかった「占い遊び (No.79)」は、放牧途中に迷子になった家畜を早く探したいという思いを表しているといえよう。遊びや生業活動に参加する子どもにとって、家畜は生活の成り立ちに必要なだけでなく、感情を分かち合う仲間として、かけがえない存在となっていることがわかる。

さらに、遊びにおけるマサイ・自然環境・家畜の緊密な関係の特徴は、遊びに使われた道具からも見られる。日本や欧米の子どもと比べて、マサイの子ども期の遊びに使われている遊具は極めて少ない。それらの道具は、主に自然環境由来のもの・家畜関連のものと、人工物関連のものの二種類に分けられる。自然物質・家畜関連の道具とは、小石や砂、雨水、植物 (実、根、葉、樹脂、樹皮、茎、枝、花、棘)、乾燥したウシの皮、乾燥した糞 (ウシ、ゾウ、キリン、ガゼル) など、自然環境から直接収集できるものである。同じものであったとしても、工夫によって多様な遊びに使われている。例えば、事例 22, 31, 75, 81 において異なる樹種から取れた棘は、その長さや硬さによって、違う方法で使われる (図3)。また、乾燥したゾウの糞は、家づくり (No.1) で家の壁になったり、火を起こす材料 (No.39) として使われたり、ボール作りではボールの詰め物にしたりして多様に使われている (図4)。ちなみに、マサイ社会において、ウシとゾウの糞はマー語で *enmujie* と呼ばれており、ヤギ・ヒツジの糞 (*ilkileleng*) または鶏やライオンなど雑食動物と肉食動物の糞 (*inkik*) とは、形によって区別されている。そのなかでも、ウシの糞は家の壁作りの材料 (遊びではなく実際の家

の材料)として、マサイの日常生活に重宝されている。以上の自然物質の利用のほか、マサイの子ども期の遊びには、数が少ないが人工物の道具も利用されている。その多くは、家庭の廃棄物(サンダル、ボトルとそのキャップ、ビニール袋、プラスチック容器、空き缶など)だが、少女たちが料理の際にこっそり取り置いておいた野菜やコメ、小麦粉、さらに遊び参加者の洋服や布(少年の衣類)なども含まれている。子どもたちは親からおもちゃを買ってもらったり、作ってもらったりする機会は極めて少ないが、生活の場で収集できたものをすべて遊びの道具として、創造的に利用している。

### 3.1.2 空間からみる子ども期の遊びの特徴

遊びの空間は、それぞれの子どもたちが参加する生業活動によって大きく左右される。図5は、マサイの生活空間となる「家(ang)」、「家の周辺・幼獣の放牧地(aulo)」、「非居住区(放牧地と森)(osero)」における、七種類の遊びの発生傾向を示

したものである。まず、遊び例がもっとも多い「身体遊び」は、全ての空間においておこなわれている。家と家の周辺では、同じホームステッドに暮らしている父系の親族関係を持つ子ども同士が一緒に遊べる場合が多い。そのなかで、家では「ルールを持つ遊び」、「物作り」、「その他」の三種類が、もっともよく実践されている。「物作り」は家の周辺でもよく実践されるが、その場合、幼獣の放牧を伴いながら遊ぶことが多い。家の周辺では「ごっこ遊び」、「植物・昆虫・その他関連の自然遊び」がよく実践される。それらの遊びは長い時間をかけて、大人から離れた空間でじっくりおこなわれる場合が多く、幼獣の放牧やほかの生業活動を進めながら遊びを継続させるために、仕事と遊びをタイミングよく切り替える必要がある。子どもたちは、家畜の様子(例えば、採食しているのか、遠く移動しているのか、それとも移動せずに休憩しているのか)に合わせて、遊びの進捗を変えたり、大人から仕事の指示を受けなが

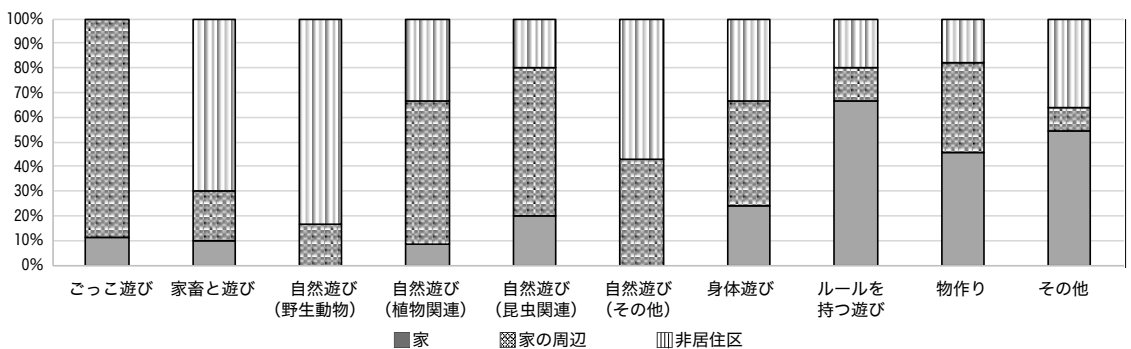


図4 マサイの生活空間による遊びの発生傾向



図5 家畜を見ながら石投げ競争(左)、放牧途中の杖作り(右)

ら遊ぶ者同士で仕事を交換したり助け合ったりして、遊びと仕事のバランスをとって両方を同時に進行させていた (図 5)。

以上のような仕事との切り替え、及びそのための子ども同士の協力は、非居住区でおこなわれる遊びからも見られる。非居住区の放牧地と森 (*os-ero*) では、「家畜との遊び」、「自然遊び」、一部の「身体遊び」がよくおこなわれる。放牧地は、家から 20km 以上も離れる場合もあるが、6 歳以上の少年たちにとって、学校休みになったら自分たちだけで通う生業活動の場でもある。広い範囲で移動しながら放牧へ出かける少年たちは、家畜の食事や休憩にあわせて自身も休憩を取るため、その間に多くの遊びを実践している。例えば、「家畜との遊び」のほとんどが少年たちの遊びである。また「身体遊び」に分類した 2 種類の杖投げ競争は、家畜とともに移動しながらでも遊べるため、少年の間で人気の遊びとして頻繁におこなわれていた。一方、同年齢帯の少女たちは、よく家から 5 km ほど離れた地域で薪を集める。薪集めは半日ぐらいかかる場合が多く、木を切ったり、縄で薪を縛ったりする作業にかなり時間と体力を要するため、その間にできる遊びが限られている。彼女らの薪集めの移動途中に観察できた遊びは、野生果物の採食 (No.23) とマサイの歌 (No.47) に限られている。

ここまで、マサイ社会における子ども期の遊びの特徴を、遊びの種類、内容、道具、仲間及び空間の側面から説明した。マサイ社会における遊びは多種多様であり、自然環境と家畜に関わるものが多いほか、身体を用いる遊びも豊富である。また、子どもたちは幼い時期から放牧や薪採りなどの生業活動に積極的に参加しているため、遊びは生業活動と同じ空間で交互におこなわれる場合が多く、生業活動の遂行に合わせた遊びへの参加が特徴的である。遊びへの参加も、それぞれの生業活動に参加している子どもに限定されており、遊

びの参加者には生業活動の参加者と同様に、性と年齢による差異があることがわかった。次は同じデータを用いて世代間の遊びの特徴を時間軸で検討する。

### 3.2. 世代間の遊びの異同



































































































表 3 は、85 種の遊びに参加していた子どもの年齢・性別、及び経験者の大人の人数と性別を整理したものである。確認された 85 種の遊びのなかに、大人世代も子ども世代も経験したことのあるものは 45 種あった。そのなかの 16 種は、大人も子どもも、男女ともに実践していた。また、子ども世代は男女ともに参加していたが、大人世代は男女どちらかが経験していたというように、性別や世代によって参加者に偏りがある遊びもある。表 3 ではそれらを「子どもと大人一部が経験したことのある遊び」「大人と一部の子供が経験したことのある遊び」「男女別の傾向が顕著な遊び」の三つに分けた。それらの項目に該当する遊びは全部で 29 種あった。

遊びの内容から見ると、石玉ゲーム (No. 63) とかくれんぼう (No.59) は、性別に関係なく大人の語りにもよく出た遊びであることがわかった。また、男女別の特徴から見ていくと、子ども全員が参加していた家づくり (No.1) と、マサイの歌・ダンス (No.47) は、成人女性ほぼ全員によって語られており、女性の間ではかなり人気のある遊びである。それに比べて、男性の間では、放牧ごっこ (No.2)、杖を用いた高・遠、標的投げ競争 (No.41, 42) が全世代共通でとても人気のある遊びであることがわかる。以上の 6 種の遊びは、世代を跨いで遊び続けられており、牧畜中心のマサイの文化を代表する遊びとして認識すべきであるといえよう。

大人世代からは言及されなかったが、子ども世代だけでおこなわれた遊びは 20 種類を確認した。それらの半分は、6 歳以下の子どもの日常実践か



表3 遊びにおける参加者の特徴

子供も大人も経験したことのある遊び					子どもと一部の大人が経験したことのある遊び					男女別の傾向が顕著な遊び				
	子ども		大人			子ども		大人			子ども		大人	
	M	F	M	F		M	F	M	F		M	F	M	F
 1 家づくり	all	all	2	40	 3 搾乳ごっこ	<6	<6	-	16	 20 害獣の追いかけ・対戦	all	-	9	-
 63 石玉ゲーム	all	all	26	32	 4 妊娠・出産ごっこ	<6	<6	-	14	 76 弓矢作り	all	-	4	-
 59 かくれんぼう(Tiit 1)	all	all	25	29	 48 歌とダンス(学校など)	all	all	-	5	 24 杖作り	all	-	6	-
 23 野生果物採食	all	all	3	16	 38 雨にジャンプ	all	all	3	-	 43 標的の石投げ競争	all	-	3	-
 52 跳び越え	all	all	12	2	 46 手を切る遊び	all	<6	6	-	 44 家畜の真似	all	-	4	-
 79 昔話し	all	all	8	8	 68 ホップスコッチ	<6	all	-	7	 83 口笛	all	-	3	-
 73 ボール作り・遊び	all	all	6	7	大人と子ども一部が参加したことのある遊び					 72 おもちゃ作り(車)	all	-	1	-
 26 木登り	all	all	4	2	 41 高・遠投げ競争(杖)	all	-	40	2	 13 乳飲み	all	-	2	-
 27 木でブランコ	all	all	2	6	 42 標的の杖投げ競争(杖)	all	-	40	2	 75 人形作り(牛)	all	-	11	-
 82 お絵かき	all	all	3	5	 58 ピアス/タワー	-	all	3	2	 74 ビーズ作り	-	all	-	7
 49 追いかけごっこ	all	all	3	3	 9 ウシを跳び越える	6~	-	2	1	 57 縄跳び	-	all	-	1
 56 山から滑り	6~	6~	2	3	 18 狩猟	6~	-	5	2	 60 かくれんぼう(Tiit 2)	6~	-	15	-
 29 樹脂採食	all	6~	1	2	 36 はちみつ採食	6~	-	2	1	 37 泥遊び(川沿い)	6~	-	2	-
 2 放牧ごっこ	all	<6	40	3						 39 泳ぐ・潜る(川)	6~	-	2	-
 47 歌とダンス(マサイ)	all	<6	20	39						 12 家畜を乗る	6~	-	1	-
 50 たたきあう	all	<6	24	4						 17 追いかけ(草食動物)	<6	-	9	-
										 7 割礼ごっこ	<6	-	-	3
子供だけの遊び					大人だけ経験した遊び									
	子ども		大人			子ども		大人			子ども		大人	
	M	F	M	F		M	F	M	F		M	F	M	F
 5 授業ごっこ	all	all	-	-	 64 炭随し	-	-	13	20	ごっこ遊び				
 6 体罰ごっこ	all	all	-	-	 21 鳥狩り	-	-	8	-					
 8 教会ごっこ	all	all	-	-	 15 闘牛	-	-	4	-	家畜と遊び				
 22 棘遊び	all	all	-	-	 16 放牧	-	-	-	2					
 62 ライオンとヤギ親子	all	all	-	-	 28 薪採集	-	-	-	3	自然遊び				
 77 スリッパ遊び	<6	<6	-	-	 40 火を起こす	-	-	6	6					
 78 洗濯遊び	<6	<6	-	-	 51 槍の持ち上げ	-	-	1	-	身体遊び				
 30 追いかけ(蝶々)	<6	<6	-	-	 53 高跳び(杖)	-	-	6	-					
 35 アリ観察	<6	<6	-	-	 54 遠跳び(杖)	-	-	2	1	ルールもつ遊び				
 71 おもちゃ作り(キャップ)	<6	<6	-	-	 55 鳥跳び(Oloimotoni)	-	-	3	6					
 10 追いかけ(家畜)	<6	<6	-	-	 61 かくれんぼう(台所)	-	-	-	5	物作り				
 11 しっぽを掴んで移動	all	-	-	-	 65 腕埋め遊び	-	-	2	-					
 25 花の蜜採食	all	-	-	-	 66 縛るゲーム	-	-	4	3	その他				
 32 ダニ殺し	-	all	-	-	 67 人食いライオン	-	-	3	-					
 19 鳥なぎまねなど	6~	-	-	-	 69 ビーズ色を当たり	-	-	-	3					
 33 昆虫を打つ、羽音	6~	-	-	-	 80 占い遊び	-	-	3	-					
 34 サソリ狩り	<6	-	-	-	 81 呪い遊び	-	-	2	-					
 34 昆虫を戦わせる	<6	-	-	-	 85 水汲み	-	-	-	1					
 70 荷造り	<6	-	-	-	 84 乳ねだり	-	-	2	5					
 45 挨拶遊び	<6	-	-	-	 14 仔ウシを捕まえる競争	-	-	1	-					

ら観察したもので、家とその周辺での自然遊びが多く含まれている（6歳以下の子どもの遊びということで、大人世代の記憶に残りにくい遊びだったという可能性もある）。子ども世代だけの遊びについてのもう一つの特徴は、現代のマサイ社会の暮らしと関連するものが多く含まれているということである。子どもたちは、自分自身の学校・教会での経験を、例えば、授業ごっこ (No.5)、体罰ごっこ (No.6)、教会ごっこ (No.8)、ライオンとヤギ親子 (No.62) などに取り入れている。また、近代化による物質文化の変化は、例えばスリッパ遊び (No.77)、洗濯遊び (No.78) などに取り入れられている。現代マサイ社会の暮らしの特徴が、子どもたちによって遊びの素材として解釈・表現されているのである。

それとは逆に、大人だけ言及されたが、子どもの日常遊びからは観察できなかったものは20種類を確認した。そのなかで特に、炭隠し (No.64) は多くの大人が思い出しており、少なくとも10年前には人気の遊びであったと推測できる。また、「闘ウシ (No.15)」「子ウシを捕まえ競争 (No.14)」などの家畜に関わる遊びや「台所でのかくれんぼう (No.61)」「縛りゲーム (No.66)」などルールを持つ遊びに言及した大人も多数いた。それらの遊びが子どもを対象にした参与観察から確認できなかったのは、マサイ社会の変化と関連づけられる。学校参加による子どもの放牧経験の減少（特に少女の牧畜経験の減少）や、同じホームステッドに暮らす家族数と子どもの数の減少、さらには日没後に学校の宿題や制服の洗濯をしなければならないなど、当時と比べて現代のマサイ社会には子ども期に影響を与える多くの社会変化が起きている。社会の変化に応じて、子どもと彼ら/彼女らの家庭が変化していることが、遊びの変化にも関係していると考えられる。

最後に、放牧・薪採集・水汲みについては、調査地のほとんどのマサイはそれらを仕事 (*esiai*) と

認識していた。聞き取り調査の際に、それらを遊びだと説明した女性らは、放牧は女性の仕事ではないから、または薪採集と水汲みは楽しいからと理由をつけて遊び (*enkiguran*) だと主張した。

## 4. 考察

### 4.1. マサイにとっての遊び

以上の結果に基づいて、考察ではまず、マサイの子ども期の遊びの特徴を整理する。また、これまでの研究で言及されたマサイの伝統スポーツと伝統遊戯が、マサイ社会に見られる遊び全体においてどのような位置付けにあるのかを検討したい。

3章の結果からわかるように、マサイ社会には多様な遊び (*enkiguran*) が存在している。そのなかで、例えば、ウシの群れへのかくれんぼう (No.59) や、放牧ごっこ (No.2)、家づくり (No.1)、野生の果物の採食 (No.23)、杖投げ (No.42, 43)、マサイの歌とダンス (No.47) など多くの遊びは、世代を超えて実践され続けている。マサイの遊びの多くは、マサイ社会における人・自然・家畜の深い関わりを表しており、性別と年齢による子ども期の生業参加の特徴も反映されている。また、少年と少女が、異なる生活空間で日常活動をおこなうため、遊びの内容と空間は、子どもたちが実際に関わる生業活動の状況を表している。

本稿の冒頭で紹介したように、植民地時代の冒険家と行政官、および早期の文化人類学者によって記述されたマサイの伝統遊戯は、マサイの青年が主体となっておこなう槍投げと垂直跳びダンスに限られている。その二つの伝統遊戯と類似する杖投げ (No.42, 43) やマサイの歌とダンス (No.47) は、子どもの間で人気の遊びである。一方、それらの遊びをマサイの文化として捉える際には、以下の点に注意を払わなければならない。まず、杖投げは放牧の際におこなわれる遊びであり、広い

空間でゆっくり移動する家畜を見守りながら遊べる、いわゆる遊びと仕事を両立できる都合のよい遊びである。この遊びの性質を理解するためには、マサイの日帰り放牧の時間的・空間的な特徴、及び、大人から独立して、少年たちにより放牧が営まれるという特徴を、前提知識として備えていなければならない。日帰り放牧に慣れた少年たちは、青年になると、遠距離移動が必要となる放牧活動を特に乾季に担うようになる。青年はマサイ社会で唯一槍を持つことのできる集団であり<sup>(3)</sup>、家畜が休憩する合間に、杖の代わりに槍投げの競争をする。彼らの槍は単に競争に使われるだけの道具ではなく、放牧中の家畜を狙う野生動物を追い払う手段にもなるため、子ども期の遊びは将来への準備になっていて、また現在・未来の生業とも深く結びついているのである。このような生業活動と遊びのつながりを無視したマサイ・オリンピックにおける伝統スポーツの捉え方は、不適切というほかない。

垂直ジャンプに関しては、青年たちのパフォーマンスとなる以前に、ダンスと歌の一部として、世代を超えて子ども期によく実践される遊びである。本稿の結果からわかるように、それらの遊びへの参加には世代間に差異が見られるものの、垂直ジャンプを含むマサイのダンスと歌は、成人女性のほぼ全員が幼い時期からよく参加しており、成人したあとでも記憶に残るほど人気の遊びである。一方、現在の子どもの参加には、全年齢帯の少年による参加が確認されたが、少女たちの参加が6歳以下に限定されている。年齢とともに減少する少女の参加について、大人たちは、牧畜活動における少女の参加の減少と、学校や教会に通う少女たちの価値観の変化によるものだと説明していた。大人たちには、このような変化は時代に合わせて起きるものだと、遊びにおける実践者の変化について反発を感じることなくそのまま受け入れる人が多い。このように、日常生活におけ

る遊びの実践は、時間軸で、地域社会の人々の生活の営みに合わせて、柔軟に変化していくものであるといえよう。マサイと同様に垂直ジャンプのダンスをするサンプルについて記述した Spencer (1986) は、非日常的におこなうサンプルの通過儀礼における青年のパフォーマンスとしてその特徴を紹介した。しかし本稿の結果からは、青年たちのダンスは、実際には子ども時代から人気のある遊びであることや、その遊びへの参加は柔軟であり、時代の状況に合わせて変化するものであることをわかった。彼の記述は、調査当時のマサイ社会における青年たちの遊びの特徴を表しているものの、それらの特徴を不変的なものとして捉えるべきではない。ユネスコの無形文化財として登録された儀礼としてのマサイのダンスと歌は、マサイ社会において、世代を超えて実践され続けている。一方、マサイの歌とダンスを、文化的意味を持つ伝統遊戯として捉える際には、それらの遊びの実践の変化に目を向けなければならない。その変化を単に文化の喪失と解釈するのではなく、関連する地域社会における生業活動や生活などの変化を含めて、文化的意味をさらに時間軸で吟味していくことが重要である。遊びを文化として捉える際に、文化が創造的に生成されていることを無視して、学校のプログラムのように不変的な知識として子どもに教えることは、文化が形骸化するだけになって、文化継承には至らなくなってしまうだろう。

#### 4.2. 子ども期の遊び研究から地域社会の遊びを動的に捉える

時間軸で変化する遊びとその継承の特徴を明らかにするために、1章では、文化人類学の分野における子ども研究の議論的展開を紹介した。そこで触れたように、近年の文化人類学における子ども研究は、子ども期における多様な文化の学び方を議論してきた。そのなかでは、遊びを含む文化

要素の学びの成り立ちを理解するために、異なる文化的・社会的な文脈における子どもの社会的役割や、生活世界における子どもの日常実践に着目して検討する重要性が提起されている (e.g. Crittenden, 2016; Lancy, 2015)。本稿では、マサイ社会における遊びの特徴を、異なる世代の子ども期の遊び経験、特にその内容、空間と参加者の特徴から考察し、時間軸で見られる差異を検討した。

子ども期に着目して観察できたマサイの遊びは、既存の記録にあるよりずっとバラエティに富んでおり、時代を超えて、子どもの中で実践され続けている。それらの遊びの実践は、年齢と性別ごとに分業して生業活動へ関わるマサイの子ども期の特徴と緊密に関連しており、マサイの子ども期の遊び空間は彼ら/彼女らが担う生業活動の空間と重なっている。マサイの子どもたちは、生業活動の内容やその空間の特徴に合わせて、異なる遊びを実践しているのである。また、子どもの生業活動における大人の直接的な参与が少ないマサイ社会 (Tian, 2016) では、遊びにおいても同様に大人の参加がほとんどない。これらの遊び実践の特徴は、マサイ社会において世代共通であり、遊びの継承は大人から子どもへの直接的な教示によるのではなく、同じ空間で生業活動を共におこなう子ども同士が、お互いに学びあうことによっておこなわれるものであると考えられる。言い換えれば、マサイ社会における遊びの継承は、子どもの生業活動への継続的な関わりや、子ども同士だけの生業活動の実践と強く関連しているといえよう。

1980年代から、マサイは学校教育の普及などの社会変化を経験してきた。その変化のなか、子どもたちは学校教育を経験しながらも、生業活動の実践を継続してきた。3章の結果で説明したように、マサイ社会で収集できた異なる世代の子ども期の遊びには、学校・教会関連のごっこ遊びの増加や、平日の日没後におこなう遊びや放牧など

の生業活動の際におこなう遊びの減少など、時間軸における実践の変化が見られる。ただし、そのような変化の背景には、外部の諸変化に対応するための生活の営みがあり、それらの変化によって、牧畜を中心としたマサイの生活を継続させることが可能になっている。生業活動や遊びの実践を変化しながら継続させることは、マサイ社会における遊びとその継承の特徴として理解すべきであろう。遊びの実践に見られる参加者や内容の変化も、遊びの主体となる子どもの社会的な役割の変化と関連づけてさらに考察していくべきであり、これは地域社会の文化要素として存在する遊びの動的な特徴を捉えるための重要な視点となりうる。

これまでの遊びの伝播と継承の研究は、遊びにおける子ども世代の実践に関する理解が極めて少ない。本稿で明らかにしたように、子どもが生業活動へ継続的に関わっているマサイ社会において、子どもたちは子ども集団が実践する生業活動のなかで並行して、親世代も経験した遊びを継続的に実践している。マサイ社会と類似する多くの民族集団においても、同じように、子どもたちが地域社会に特有な遊びを日常生活の中で継続的に実践しているであろう。子どもの日常実践に着目し、民族誌的な記述によって、いま生きる社会における遊びの実践を明らかにすることは、変化を経験しながら伝統を柔軟に作り出し続ける民族集団の文化的特徴を理解するための重要な手になりになる。

## 5. まとめと展望

本稿は、東アフリカ牧畜民マサイの社会における遊びとその継承の特徴を理解するため、異なる世代の子ども期の遊びの実践に着目して、民族誌的な記述によって、その特徴を検討してきた。アフリカでは近年、伝統スポーツと遊戯を、次世代への文化継承の重要な素材として利用するための活動が展開しつつある。一方、多様な文化や生活

習慣を持つアフリカ諸地域における遊び研究の蓄積が不足しているため、現在になっても地域の文化としての遊びとその継承の特徴についての理解は、発達心理学や教育学における普遍的な（しばしば西欧社会的な）遊び論に基づく傾向が見られる。

マサイの異なる世代間の子ども期の遊び実践からわかるように、マサイ社会における遊びは、これまで注目された青年の垂直ジャンプと槍投げ以外にも多種多様なものが存在している。その多くは、マサイの家畜や自然環境との深い関わりを反映しており、時代を超えて現代になってもマサイにとっては人気の遊びとして継続的に実践されている。そのような遊び実践の継続は、大人から子どもへの教えよりは、学校教育などの諸変化へ対処しながらも、継続的に生業活動へ参加する子どもたちによるものであると認識すべきであろう。本研究の結果からは、変化を経験し続けている民族集団の文化を代表する遊びが喪失しつつあるといった悲観的な捉え方は、必ずしも全ての地域に通用するとはいえないということを主張したい。変化の激しい今の時代だからこそ、民族誌的な調査によって、地域社会における遊びの特徴を子どもの日常実践からさらに見つめて再発見していく必要がある。

#### 【謝辞】

本研究は、JSPS 科研費 NO.18H04192 と NO.20H04570 「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築—多文化をつなぐ顔と身体表現—」の助成、及び「2020 年度稲盛研究助成」を受けたものです。本稿の修正にあたって、査読者及び編集者の方々から貴重なコメントをいただきました。この場を借りて、御礼を申し上げます。

#### 【脚注】

- (1) 調査期間中、2014 年 11 月前半と 2015 年 2 月後半の、合わせて約 1 ヶ月間は学校期間だったため、調査対象となる子どもたちが学校に通っていた。残りの 3 ヶ月間は、学校休み期間のほか教師連盟による全国規模のストライキが起こったため、子どもたちは学校を休んでいた。学校に通っている間、子どもたちは早起きなどの工夫をして、家事に参加していた。また、学齢期の少女たちは、日曜日の教会の行事に定期的に参加していたが、少年たちは休みになると家畜の放牧や給水などに関わっていた。
- (2) 亀井 (2012) は、カメルーンの狩猟採集民バカの子どもの日常生活の全体を概観して、遊びの動機やその中心となる要素によって分類した。この分類によると、バカの子どもたちの遊びは「狩猟採集活動に関わる遊び」、「歌・踊り・音に関する遊び」、「身体とその動きを楽しむ遊び」、「衣食住・家事・道具に関する遊び」、「近代的事物に関わる遊び」、「ルールの確立したゲーム」と「その他」の 7 類に分けられている。本稿における遊びは、亀井の分類方法を参考に、マサイの子どもたちの生活全般を概観しながら、それぞれの遊びにおける当事者の動機づけや遊び行動の中心となる要素を抽出して分類した。
- (3) マサイをはじめとする東アフリカの牧畜社会において、年齢階梯に従って割礼を受けて大人となった青年たちは、村の人々と家畜の安全を守る重要な役割を担うため、牧畜社会においては、「戦士 (warrior)」とも呼ばれる (c.f. Spencer, 1993) 特別な存在となっている。男性は青年の時期だけ、長い髪をつけ、全身をビーズで飾り、槍を携行する。槍は、特に危険な野生動物から家畜を守る際に利用するが、長老になるにつれ、社会的な役割の変化によって、槍の代わりに太めの杖を日常的に携行するようになる。

#### 【引用・参考文献】

- Altmann, J. (1974) Observational Study of Behavior: Sampling Methods. *Behaviour*, 49(3/4):227-266.
- Bale, J. and Sang, J. (1996) *Kenyan Running: Movement Culture, Geography and Global Change*. London: Frank Cass Publishers.
- Cheska, A.T. (1987) *Traditional Games and Dances in West African Nations*. Schorndorf: Verlag Karl Hofmann.
- Crittenden, A.N. (2016) Children's Foraging and Play among the Hadza: The Evolutionary Significance of "Work Play". (In Meehan, C.L., and Crittenden, A.N. eds.) *Childhood: Origins, Evolution, & Implications*. Santa Fe: School for Advanced Research Press: 155-172.
- Gallois, S., Duda, R., Hewlett, B., and Reyes-Garcia, V. (2015) *Children's Daily Activities and Knowledge Acquisition: A*

- Case Study among the Baka from Southeastern Cameroon. *Journal of Ethnobiology and Ethnomedicine*, 11:86. Open access: doi:10.1186/s13002-015-0072-9. (accessed 2020-9-20).
- Grandin, B.E. (1991) The Maasai: Socio-Historical Context and Group Ranches. In (Bekure, S., et al. eds.) *Maasai Herding: An Analysis of the Livestock Production System of Maasai Pastoralists in Eastern Kajiado District, Kenya*. International Livestock Center for Africa, Addis Ababa. Open access: <http://www.fao.org/wairdocs/ilri/x5552e/x5552e00.htm#Contents>. (accessed 2020-9-20).
- Hemingway, E. (1936) *Green Hills of Africa*. London: Jonathan Cape Ltd.
- Henrich, J., Heine, S.J., and Norenzayan, A. (2010) The Weirdest People in the World? *Behavioral and Brain Sciences*, 33(2/3):61-83.
- Kasfir, S.L. (2007) *African Art and the Colonial Encounter: Inventing a Global Commodity*. Bloomington: Indiana University Press.
- Lancy, D. (2010) Learning 'from Nobody': The Limited Role of Teaching in Folk Models of Children's Development. *Childhood in the Past*, 3(1):79-106.
- Lancy, D. (2015) Mapping the Landscape of Children's Play. *Sociology, Social Work and Anthropology Faculty Publications*, Paper 572. [http://digitalcommons.usu.edu/sswa\\_facpubs/572/](http://digitalcommons.usu.edu/sswa_facpubs/572/). (accessed 2020-9-20).
- Mead, M. (1928) *Samoaan Children at Work and Play*. *Natural History*, 28:626-636.
- Piaget, J. (1999) *Play, Dreams and Imitation in Childhood*. London: Routledge.
- Roberts, J.M. and Sutton-Smith, B. (1962) Child Training and Game Involvement. *Ethnology*, 1(2):166-185.
- Schwartzman, H. ed. (1978) *Transformations: The anthropology of Children's Play*. New York: Plenum Press.
- Spencer, P. (1986) Dance as Antithesis in the Samburu Discourse. (In Spencer, P. ed.) *Society and the Dance: The Social Anthropology of Process and Performance*. Cambridge: Cambridge University Press: 140-164.
- Spencer, P. (1993) Becoming Maasai, Being in Time. (In Spear, T., and Waller, R. eds.) *Being Maasai: Ethnicity & Identity in East Africa*. North America: Ohio University Press: 140-156.
- Spittler, G. (2012) Children's Work in a Family Economy: A Case Study and Theoretical Discussion. (In Spittler, G., and Bourdillon, M. eds.) *African Children at Work: Working and Learning in Growing Up for Life*. Berlin: LIT Verlag Münster: 57-86.
- Spittler, G., and Bourdillon, M. eds. (2012) *African Children at Work: Working and Learning in Growing Up for Life*. Berlin: LIT Verlag Münster.
- Sutton-Smith, B. (2001) *The Ambiguity of Play*. Massachusetts: Harvard University Press.
- Tian, X. (2016) Day-to-Day Accumulation of Indigenous Ecological Knowledge: A Case Study of Pastoral Maasai Children in Southern Kenya. *African Study Monographs*, 37:75-102.
- (2017) Ethnobotanical Knowledge Acquisition during Daily Chores: The Firewood Collection of Pastoral Maasai Girls in Southern Kenya. *The Journal of Ethnobiology and Ethnomedicine*, 13:2. DOI: 10.1186/s13002-016-0131-x. (accessed 2020-9-20).
- Tylor, E.B. (1881) *Anthropology: An Introduction to the Study of Man and Civilization*. London: Macmillan and Co.
- UNESCO (2017) *Traditional Sports and Games, Challenges for the Future: Concept Note on Traditional Sports and Games*. <https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000252837> (accessed 2020-9-25).
- UNESCO (2018) *International Assistance from the Intangible Cultural Heritage Fund Progress Narrative Report, Nomination file No. 01390*. <https://ich.unesco.org/en/USL/enkipaata-eunoto-and-olng-esherr-three-male-rites-of-passage-of-the-maasai-community-01390>. (accessed 2020-9-25)
- Vygotsky, L.S. (1967) Play and Its Role in the Mental Development of the Child. *Soviet Psychology*, 5(3):6-18.
- Whiting, B.B. ed. (1963) *Six Cultures: Studies of Child Rearing*. New York: Wiley.
- 亀井伸孝 (2012) 森に遊び森に学ぶ：狩猟採集民の子どもの遊び．亀井伸孝編，遊びの人類学ことはじめ：フィールドで出会った〈子ども〉たち．昭和堂：39-80.
- 中村香子 (2017) 「伝統」を見せ物に「苦境」で稼ぐ：「マサイ」民族文化観光の新たな展開，アフリカ研究，92:69-81.
- 清水貴夫・亀井伸孝編 (2017) 子どもたちの生きるアフリカ：伝統と開発がせめぎあう大地で．昭和堂．
- 寒川恒夫 (2003) イヌクジュアク・イヌイトの民族遊戯変容．スポーツ史研究，11:47-56.
- 高田明 (2019) 社会化をうながす複合的文脈：グイ / ガナにおけるジムナスティックの事例から．杉島敬志編，コミュニケーション的存在論の人類学．臨川書店：276-303.